

## 『グリーン・ゲイブルスのアン』：マリラの物語

福田 二郎

日本では村岡花子による翻訳が普及したことにより、『赤毛のアン』として知られている Lucy Maud Montgomery の *Anne of Green Gables* は、発売当初から爆発的な人気を博した。1908年の出版から、たったの2ヵ月で4回の増刷となった。インターネットの口コミがあるわけでもなく、本が読まれて評判が広がるにしても、これは驚くほどのスピードではないか。そして半年で6刷、5年で32刷。そして増刷の回数だけではない。6年目の38刷はなんと15万部も印刷されている。

現在まで5千万部以上が売れ、36カ国以上の言語に翻訳されアニメ、漫画、映画、ラジオドラマ、テレビドラマ、ミュージカル、演劇など、あらゆるメディアを通して『アン』は世界中の人々に親しまれてきた。一般的には、「人々」ではなく、「少女たち」に親しまれてきたと言われることが多いだろう。「少女文学」という言葉は一般的に使われていないが、この作品はウィキペディア英語版では“Written for all ages, it has been considered a classic children’s novel since the mid-twentieth century”というように、世間一般には「児童文学」という認識がされている。

つまり「逆境のなかで懸命に生きる幼い孤児が、保護者と出会い、失敗を繰り返しながらも健気に努力を続けて大人になってゆく成長物語」といったところが最もポピュラーな紹介の仕方であろう。モンゴメリの他の作品でも、主人公の少女が孤児であったり、親からの愛を受けられない厳しい環境の中で、努力を重ねて生き抜いてゆく話として *Emily of New Moon*(1923)、*The Blue Castle*(1926) や *Jane of Lantern Hill* (1937) といった作品があり、これらも高い評価を受けている。それらはモンゴメリ自身が物心もつかないうちに母

親を亡くし、その後も苦労の連続であった彼女の実人生に重ね合わせる解釈がなされてきた。

しかし『アン』の物語は、保護者となるマリラの描写に大きなウエイトが置かれており、母（保護者）と子の葛藤や相互関係という視点から解釈しようとする批評もなされてきた。<sup>1</sup> 本論では、語りの手法やプロットの構成を分析しながら、この作品を「マリラの物語」として読み直してみたい。モンゴメリの他の作品には、老いてゆく孤独な主人公が子供や若者に慰めを見出す物語群、“Elizabeth’s Child”(1904)や“Old Lady Lloyd”(1912)などがあり、この作品がその範疇に連なる作品と位置づけることもできよう。もちろんこの作品の主人公がアンではなくマリラだというつもりはない。この作品の構造が、アンとの物語とマリラの物語の二つが重なり合っているのであり、本論では後者のマリラの物語を中心に分析してゆく。

物語冒頭の3章は、アヴォンリーに住む3人の驚きがタイトルになっている。孤児を引き取るという話を聞いてリンド夫人が驚き、その孤児（男の子を引き取るつもりが間違いで女の子であったアン）を迎えに行ったマッシュウが驚き、グリーン・ゲイブルスでアンと出会ったマリラが驚くという設定である。小説の構造から見て、「アヴォンリーの人々が孤児を迎える」という視点から始まっているのだ。アンを主人公にするならば、彼女の視点から話が始まり、孤児院から旅をしてマッシュウやマリラに出会うという設定もありえるだろう。しかしこの物語は、ひょんなことからマリラが（決定権はマリラにあり、さらにマッシュウは最初からアン世話係にはならないという取り決めがなされる）アンを引き取るという視点になっているのである。つまり「マリラの子育て奮闘記」という

構図なのだ。

アンを引き取った理由は、最初は「憐み」である。マリラはアンの言葉から、これまでどれだけ辛い思いをしてきたかを推し測り、また自分たちがアンを引き取らなければ、これから彼女にどれだけ厳しい生活が待っているかと考える。そもそも養子をもらおうと考えたきっかけは、年老いてきたマシュウの農作業を手伝ってもらうために男の子がほしかったのであるが、マリラは「必要のない」女の子を救うためにアンを引き取る決心をする。その決め手はマシュウが「我々のほうがあの子の役に立てるかもしれないよ」と言った言葉だ。

この小説をマリラの物語として見るとき、その大きなテーマのひとつは「マリラの人生を取り戻すこと」である。彼女は婚期を逸し、結婚や子育てを経験しないままに年を取ってきた。子育ては、子供が何かの役に立つためといった目的から始まるわけではない。生きていく能力のない子供を世話して責任を背負い込み、全面的な保護者となることである。しかしそれは一方的な「奉仕」ではない。自分が保護しなければ生きていけない子供の支えとなることは、自分の存在意義を確認させてもらう行為でもあるのだ。

物語の初めから見ている。語り手（作家）による説明では、グリーン・ゲイブルスはマリラによって「痛ましいほどに」清潔で、隅々まで塵ひとつないような管理がされている。

Here sat Marilla Cuthbert, when she sat at all, always slightly distrustful of sunshine, which seemed to her too dancing and irresponsible a thing for a world which was meant to be taken seriously; and here she sat now, knitting, and the table behind her was laid for supper.<sup>2</sup>

舞台となるプリンスエドワード島にはスコットランド系の移民が多く、大部分が禁欲的な長老派であった。なかでもマリラは熱心な信者であり、6月の太陽のきらめきにも心がざわめいてはいけな

いと思う程、自制心を強く保ち、頑なに感情を押し殺して生きてきた女性である。

それがアンとの初対面で、早くも解け出すことになる。引き取り手が見つかったと思って喜びの絶頂から、女の子を欲しがっているわけではなかったと知って絶望しアンが大泣きをしたとき、彼女は“the most tragical thing”という、およそ小娘が使いそうにない大げさな言葉を発した。そのときに、マリラは長い間使わずに錆びついていた、出すのもためらう微笑みを浮かべてしまうのであった。

Something like a reluctant smile, rather rusty from long disuse, mellowed Marilla's grim expression. (67)

マリラは子供にどのように話しかけたらいいか、わからずにとまどってしまう。そしてアンを引き取りたいと言い出した無慈悲で厳しい女性のことを、アンが「錐のような人」と表現したとき、あまりにぴったりと思ったのか、マリラはふたたび笑いそうになってしまう。

Marilla smothered a smile under the conviction that Anne must be reproved for such a speech. (95)

敬虔なキリスト教信者として、子供が大人を揶揄することはたしなめねばならないと考える。しかしアンの表現は的を得たものであり、心情的にはマリラも同意見なのである。このように、マリラはアンを通じて自然な感情の発露が溢れ出し、それを抑えなければならないと思いつつも、それまで生きてきた信条が揺さぶられるのである。

アンがやってきたあとは、マリラの視点から彼女を迎え入れ、しつけてゆく構図になっている。章の終わりが、マリラの感想になっていることに注目しよう。マリラがアンを引き取る決心をする第6章“Marilla Makes Up Her Mind”の最後は、マリラの決意のモノローグで終わる。

“I won’t tell her tonight that she can stay,” she reflected, as she strained the milk into the creamers. “She’d be so excited that she wouldn’t sleep a wink. Marilla Cuthbert, you’re fairly in for it. Did you ever suppose you’d see the day when you’d be adopting an orphan girl? It’s surprising enough; but not so surprising as that Matthew should be at the bottom of it, him that always seemed to have such a mortal dread of little girls. Anyhow, we’ve decided on the experiment and goodness only knows what will come of it.” (96)

次の第7章 “Anne Says Her Prayers” の最後は、マリラのマッシュウに対するセリフである。アンに宗教教育が必要だと気づいたマリラは、それまでの自分の人生が気楽であったこと、そしてついに転機を迎え、困難に満ちた子育てへの取り組みが始まったいまは気力に溢れていると語っている。

“Matthew Cuthbert, it’s about time somebody adopted that child and taught her something. She’s next door to a perfect heathen. Will you believe that she never said a prayer in her life till tonight? I’ll send her to the manse tomorrow and borrow the Peep of the Day series, that’s what I’ll do. And she shall go to Sunday-school just as soon as I can get some suitable clothes made for her. I foresee that I shall have my hands full. Well, well, we can’t get through this world without our share of trouble. I’ve had a pretty easy life of it so far, but my time has come at last and I suppose I’ll just have to make the best of it.” (100)

そして子育てが始まると、マリラには思いのほか変化が現れる。アンは家のまわりを散策し、その報告をマッシュウとマリラにするのだが、マッシュウは当然とはいえ、マリラでさえもそのおしゃべりに引き込まれてゆく。

All these raptured voyages of exploration

were made in the odd half hours which she was allowed for play, and Anne talked Matthew and Marilla half-deaf over her discoveries. Not that Matthew complained, to be sure; he listened to it all with a wordless smile of enjoyment on his face; Marilla permitted the “chatter” until she found herself becoming too interested in it, whereupon she always promptly quenched Anne by a curt command to hold her tongue. (112)

マリラは内心アンの言葉に惹かれ過ぎてしまうことに気付き、自制心を働かせてそれを避けようとする。しかしマリラは思わずリンド夫人に、アンが好きであること、グリーン・ゲイブルスに変化が現れたことを告白する。“I must say I like her myself—although I admit she has her faults. The house seems a different place already. She’s a real bright little thing.” (113)

このあとでリンド夫人はアンの容姿をひどくけなし、アンは痲癩を起してしまう。立場上マリラはたしなめねばならないと考えるのだが、心の中で自分の幼い頃の記憶が甦る。

“Just imagine how you would feel if somebody told you to your face that you were skinny and ugly,” pleaded Anne tearfully.

An old remembrance suddenly rose up before Marilla. She had been a very small child when she had heard one aunt say of her to another, “What a pity she is such a dark, homely little thing.” Marilla was every day of fifty before the sting had gone out of that memory. (117)

子育ては一方的なつけではない。子供の姿を見て、自分を振り返る作業でもある。この第9章 “Mrs. Rachel Lynde Is Properly Horrified” の終わりは、大人に無礼な言動をしたアンをたしなめなければならぬ建前と、自分自身が子供の頃に経験した辛い思い出が甦り、マリラの内心に湧き起ったリンド夫人への反発、そしてアンが彼女をぎゃ

ふんと言わせた痛快な出来事に、マリラは笑いをおさえることができずに葛藤する。

Leaving this Parthian shaft to rankle in Anne's stormy bosom, Marilla descended to the kitchen, grievously troubled in mind and vexed in soul. She was as angry with herself as with Anne, because, whenever she recalled Mrs. Rachel's dumbfounded countenance her lips twitched with amusement and she felt a most reprehensible desire to laugh. (118)

第10章“Anne's Apology”では、アンはリンド夫人に芝居めいた謝罪をして事はおさまる。ここでもマリラは建前と本音に葛藤する。

Marilla was dismayed at finding herself inclined to laugh over the recollection. She had also an uneasy feeling that she ought to scold Anne for apologizing so well; but then, that was ridiculous! She compromised with her conscience by saying severely:

“I hope you won't have occasion to make many more such apologies. I hope you'll try to control your temper now, Anne.” (125)

「建前」に生きてきたマリラであるが、アンを通じて彼女は自分の中の「本音」を発見する。この段階では、アンに厳しく接することによって彼女は必死にそれを隠そうとしているのであるが。

この章は、アンとマリラがふたりで帰宅する場面で終わる。そこでアンはそっとマリラと手をつなぐのであった。

Anne suddenly came close to Marilla and slipped her hand into the older woman's hard palm.

“It's lovely to be going home and know it's home,” she said. “I love Green Gables already, and I never loved any place before. No place ever

seemed like home. Oh, Marilla, I'm so happy. I could pray right now and not find it a bit hard.”

Something warm and pleasant welled up in Marilla's heart at touch of that thin little hand in her own—a throb of the maternity she had missed, perhaps. Its very unaccustomedness and sweetness disturbed her. She hastened to restore her sensations to their normal calm by inculcating a moral.

“If you'll be a good girl you'll always be happy, Anne. And you should never find it hard to say your prayers.” (126)

子供の手に触れて、マリラはそれまで経験することのなかった母性本能が沸き上がり、暖かく甘美な気持ちに動揺する。

次の第11章“Anne's Impressions Of Sunday School”では、アンは教会の日曜学校に行き、初めて牧師の説教を聞く。アンはあっけらかんと「ひどく長い」、「牧師には想像力がない」、「聞いていられなくて他のことを考えていた」などといった報告をし、マリラを驚かせるのである。

Marilla felt helplessly that all this should be sternly reprov'd, but she was hampered by the undeniable fact that some of the things Anne had said, especially about the minister's sermons and Mr. Bell's prayers, were what she herself had really thought deep down in her heart for years, but had never given expression to. It almost seemed to her that those secret, unuttered, critical thoughts had suddenly taken visible and accusing shape and form in the person of this outspoken morsel of neglected humanity.(133)

アンを厳しく叱らなければならないとは思っていても、マリラは長年自分の心の奥底に隠されていた思いが、アンによって、まさに凶星であらわにされるのであった。ここでマリラはアンを叱ることができなかつた。彼女は自己発見だけではな

く、変化もし始めるのだ。アヴォンリーの御意見番であり権威であるリンド夫人への批判は、世俗の社会・慣習への見直しであり、牧師への批判は、マリラが最も重きを置いてきた宗教的権威への見直しである。マリラの長年凝り固まっていた考え方、生き方が、アンの粗野ではあるが、無垢で純粋な物の見方に触れて、再構築がなされてゆく。

次の第12章“A Solemn Vow And Promise”は、アンが隣家のダイアナと友達になる話である。ここでも章の終わりはマリラの感想である。

Dear me, it's only three weeks since she came, and it seems as if she'd been here always. I can't imagine the place without her. Now, don't be looking I told-you-so, Matthew. That's bad enough in a woman, but it isn't to be endured in a man. I'm perfectly willing to own up that I'm glad I consented to keep the child and that I'm getting fond of her, but don't you rub it in, Matthew Cuthbert.” (142)

マリラにとって、アンがグリーン・ゲイブルスに来てからは新鮮な驚きと喜びの連続である。ここまでが、いわば導入部と言ってもよいであろう。その構図を見てきたように、ほとんどの章がマリラのアンについての思いで締めくくられている。この物語はマリラの視点から、子育てを通じて彼女自身の価値観が揺さぶられ、心の奥底に潜んでいた思いを引き出され、それによって自己発見をし、さらに態度や言動に変化も見られるのである。<sup>3</sup>

ここで作品分析に、英国の小説家 E. M. フォースターの小説論 *Aspects of the Novel* を参考にした。フォースターによれば、小説の登場人物は“flat characters”と“round characters”に分類することが出来る。それぞれ「扁平人物」、「円形人物」と訳すこともできるが、“flat”は平坦ゆえに「色調が単調」、「不活発」という意味であり、“round”は立体感があるから「活発」、「生き生きと描かれた」という意味がある。

Flat characters were called “humours” in the seventeenth century, and are sometimes called types, and sometimes caricatures. In their purest form, they are constructed round a single idea or quality: when there is more than one factor in them, we get the beginning of the curve towards the round.<sup>4</sup>

「扁平人物」とは、17世紀に由来する「気質」、すなわち単純な類型であり、リンド夫人のような「善人ではあるがおせっかいで口が悪い」だとか、マッシュウのように「やさしくて引っ込み思案」といった型にはまった人物である。

一方で「円形人物」は、二つ以上の性質が複雑にからみあっており、また変化・成長してゆく「生きた人間」である。「円形」を見分ける方法は、その人物が「読者を納得できる形で驚かせることができる」ことだ。<sup>5</sup>この考え方で見ると、マッシュウは典型的な「扁平」のようだが、アンが欲しがっている「膨らんだ袖」の服を町まで買いに行く行為に出るといふ驚きを読者に見せるので、若干「円形」の部分があるかもしれない。しかし結局店に行っても内気で買い物は出来ず、「やはり」と思わせる人物だ。

アンは成長してゆく。グリーン・ゲイブルスに来た当初は、おしゃべりで軽率であり、大人を驚かせるような発言や行動を見せ、それが勉強熱心な学校の生徒となり、次第に落ち着いた思春期を迎えて大人になってゆく。しかしその成長に見られる変化は、読者を驚かせるようなものではなく、一般的でごくありふれたものではないか。

マリラの変化についてはマリラ自身もとまどい驚いているが、ここまで見てきたように、こちらは読者を驚かせる意外な変化の連続である。例を挙げてみよう。アンは日曜学校のピクニックに誘われているとき、皆が持ってゆくバスケット（つまりおやつ）をマリラに恐る恐るお願いするが、それを持たせてくれると聞いたとき、アンは衝動的にマリラに抱きついてキスをする。

“Oh, you dear good Marilla. Oh, you are so kind to me. Oh, I’m so much obliged to you.”

Getting through with her “ohs” Anne cast herself into Marilla’s arms and rapturously kissed her hollow cheek. It was the first time in her whole life that childish lips had voluntarily touched Marilla’s face. Again that sudden sensation of startling sweetness thrilled her. She was secretly vastly pleased at Anne’s impulsive caress, which was probably the reason why she said brusquely:

“There, there, never mind your kissing nonsense. …” (144)

このときマリラは当惑してぶっきらぼうな対応をしてしまうが、その甘美な喜びに内心は打ち震えてしまう。最初はアンを「引き取って救ってあげる」という気持ちから始まったことだが、マリラはすぐにそれが一方的な行為ではなく、子供から得難い大きな喜びを受け取れるという、子育ての相互関係に気がつくのである。

アンは「心の友」となったダイアナが、いつか結婚して自分の元を去って行ってしまうことを想像して、マリラの前で泣き崩れる。

Marilla turned quickly away to hide her twitching face; but it was no use; she collapsed on the nearest chair and burst into such a hearty and unusual peal of laughter that Matthew, crossing the yard outside, halted in amazement. When had he heard Marilla laugh like that before? (175)

たしかに小さな子供が親友の結婚を心配して泣くことなどは笑い事だろう。しかし微笑むことすらしないほどのマリラが、外に聞こえるほどの大笑いをさせた背景には、引き取った孤児には良い友達が出来て、やさしい思いやりの態度を見せてくれたことに対する安心感があるからだろう。マリラは子育ての喜びから感情を表に出すようになってくる。これもまたアンが日曜学校に行き、外部

との交流が始まった章の締めくくりである。

その次の章で、アンはダイアナをお茶に招き、そこで間違っってワインを飲ませてしまうという失敗をしてしまう。この章の締めくくりでは、ダイアナを酔わせたことに激怒したダイアナの母親に対して、アンが神様を持ち出して不満をぶちまけ、それに対するマリラの心境が語られる。

“Anne, you shouldn’t say such things” rebuked Marilla, striving to overcome that unholy tendency to laughter which she was dismayed to find growing upon her. And indeed, when she told the whole story to Matthew that night, she did laugh heartily over Anne’s tribulations.

But when she slipped into the east gable before going to bed and found that Anne had cried herself to sleep an unaccustomed softness crept into her face.

“Poor little soul,” she murmured, lifting a loose curl of hair from the child’s tear-stained face. Then she bent down and kissed the flushed cheek on the pillow. (189)

ここでマリラはアンの失敗にふたたび大笑いをしてしまうが、泣いて寝てしまったアンの顔を見て、「普段にはない柔らかな表情」が現れ、心からアンを可哀そうに思うのであった。このように“unaccustomed”といった表現が何度も繰り返されるが、それまで押し殺されてきた感情が露わになるという、明らかにマリラの変化を表すものだろう。

マリラの自己発見は、喜びや笑いだけではない。アンが怪我をして運ばれてきたとき、マリラは「啓示」を受ける。

At that moment Marilla had a revelation. In the sudden stab of fear that pierced her very heart she realized what Anne had come to mean to her. She would have admitted that she liked Anne—nay, that she was very fond of Anne. But now

she knew as she hurried wildly down the slope that Anne was dearer to her than anything else on earth.

“Mr. Barry, what has happened to her?” she gasped, more white and shaken than the self-contained, sensible Marilla had been for many years. (254)

日々の平穏な生活の中では、浸っている幸せには気づかないものである。その幸せが失われる危機に直面したときだけ、自分がどれだけ幸せであったか、その大切なものを自覚するのである。このような不安、心配、悲しみは、失う危機にあるものから得られる喜びの大きさに比例する。このようにマリラはアンが存在によって、長年持つことのなかった喜怒哀楽を経験し、人生を取り戻してゆくのである。

次にこの小説の語りの手法を分析し、どのようにマリラが描かれているかを見てみたい。注目すべきは話法の巧みな使い分けである。まずは序盤に、マリラがアンと出会い、引き取ることを決心し、その後アンへの対応にとまどう部分は、自由間接話法が効果的に使われている。以下の引用は、アンがグリーン・ゲイブルスにやってきた翌日の朝、マリラが想像にふけるアンを目の前に当惑し、彼女を引き取るかどうかを考え始める場面である。

As it progressed Anne became more and more abstracted, eating mechanically, with her big eyes fixed unswervingly and unseeingly on the sky outside the window. This made Marilla more nervous than ever; she had an uncomfortable feeling that while this odd child's body might be there at the table her spirit was far away in some remote airy cloudland, borne aloft on the wings of imagination. Who would want such a child about the place?

Yet Matthew wished to keep her, of all unaccountable things! Marilla felt that he wanted

it just as much this morning as he had the night before, and that he would go on wanting it. That was Matthew's way—take a whim into his head and cling to it with the most amazing silent persistency—a persistency ten times more potent and effectual in its very silence than if he had talked it out. (79)

上記の下線部が、自由間接話法によって、マリラの心の中が描かれる文章だ。段落の最初は、アンが朝食を食べながら突然空想にふけり始め、その様子にマリラがそわそわし始める、といった場面が、間接話法によって「作者による説明」がなされる。これは外側から見る情景描写だ。そして段落の最後に突然、「誰がこんな子供をここにほしいなんて思うだろうか？」と自由間接話法が出てくる。口に出してはいないので、直接話法の場面ではない。間接話法にすれば、「マリラはこんな子供をほしいとは思わなかった」という作者による説明になるだろう。一方で自由間接話法は、いわば心の中の思い(言葉)を直接語る手法だ。それだけ臨場感が出ることに加え、読者に感情移入をさせて、自由間接話法の視点(この場合はマリラ)に読者を同一させる効果を持つ。この時点で読者はすでに、マッシュウがアンを引き取りたいと思っていることを知っている。それは作者によって間接話法で説明されている。しかしここで自由間接話法が出てきてマリラの心の叫び、「こんな子供を引き取る？でもマッシュウはなぜだかそうしたいんだ！」という視点から物語が語られる。プロタゴニストはマリラではないか。

次はアンを養子の仲介役をしてくれた夫人のところへ連れてゆく場面である。馬車の上で、マリラはアンの子立ちの話を聞いていた。マリラはその辛く悲しい話を聞き、このままアンを返していいものか葛藤する。そのハイライトが自由間接話法によって描かれる。

Marilla asked no more questions. Anne gave herself up to a silent rapture over the shore road

and Marilla guided the sorrel abstractedly while she pondered deeply. Pity was suddenly stirring in her heart for the child. What a starved, unloved life she had had—a life of drudgery and poverty and neglect; for Marilla was shrewd enough to read between the lines of Anne's history and divine the truth. No wonder she had been so delighted at the prospect of a real home. It was a pity she had to be sent back. What if she, Marilla, should indulge Matthew's unaccountable whim and let her stay? He was set on it; and the child seemed a nice, teachable little thing. (88-9)

「なんて飢えた、愛されることのない人生をこの子は送ってきたのだろう。辛く貧しく、世話もされることのない生活を！」というマリラの思いを、客観的な説明ではなく、リアルに直接描写している。ここでは「アンの視点」の物語ではない。「アンを見る大人（マリラ）」の物語である。

もうひとつ、マリラの子育てが始まったところで、マリラの誤解によってアンがブローチを盗み出したのではないか、という嫌疑がかかったことである。アンが風変わりな失敗をすることには大きな問題はないが、平気な顔で悪質な嘘をついていると思い込んだマリラは激しく動揺した。

When Anne had gone Marilla went about her evening tasks in a very disturbed state of mind. She was worried about her valuable brooch. What if Anne had lost it? And how wicked of the child to deny having taken it, when anybody could see she must have! With such an innocent face, too! (151)

アンを自由間接話法によって“the child”と表現することによって、マリラはまだアンを観察している段階にあることが示される。このエピソードは、話の終盤になるまでアンがブローチを盗んだわけではなかったことが明かされない。マリラが

誤解から動揺して、自分でブローチを発見するのである。そして最後にはアンがピクニックを楽しんだという報告をマリラが聞く場面で終わる。つまり最初から最後まで、マリラの視点からの話なのである。

次に間接話法であるが、これは作者による描写・説明であるから、マリラが自覚していない思いや変化の解説に使われる。すでに引用した部分を見直してみよう。

Something like a reluctant smile, rather rusty from long disuse, mellowed Marilla's grim expression. (67)

下線部の形容詞は、マリラの自覚していない頑なさがアンによってほぐされてゆく説明だ。

Its very unaccustomedness and sweetness disturbed her. She hastened to restore her sensations to their normal calm by inculcating a moral. (126)

これら下線部の名詞は、マリラがそれまで味わったことのない新鮮な喜びに触れていることを示している。

次はアンが牧師の説教がつまらないと言ったときのマリラの反応である。

Marilla felt helplessly that all this should be sternly reprov'd, but she was hampered by the undeniable fact that some of the things Anne had said, especially about the minister's sermons and Mr. Bell's prayers, were what she herself had really thought deep down in her heart for years, but had never given expression to. It almost seemed to her that those secret, unuttered, critical thoughts had suddenly taken visible and accusing shape and form in the person of this outspoken morsel of neglected humanity. (133)

下線部は前述の“unaccustomedness”と同様に、マリラがアンを通じてそれまで長い間封印してきた、自覚せずに押し殺していた思いを意識し、変化が訪れようとしていることを示唆している。

It was the first time in her whole life that childish lips had voluntarily touched Marilla's face. Again that sudden sensation of startling sweetness thrilled her. She was secretly vastly pleased at Anne's impulsive caress (144)

ここでは説明の必要もないが、マリラが子供からどれだけの喜びを受けているかの描写だ。このように間接話法によって、マリラが自覚していない、もしくは自覚することを封印してきた人生の喜びに覚醒してゆくところが描かれている。

最後に直接話法であるが、これはもちろんおしゃべりなアンのセリフに多用される。次の引用は、アンが勉強に励んでいる様子をマリラに語っている場面で、章の最後のセリフである。序盤の章は、アンを引き取り、子育てが始まる段階での迷いや当惑を、マリラの思いやセリフで締めくくられた。それが落ち着き、グリーン・ゲイブルスでのアンの生活が始まり、友人が出来て学校に通い始めると、各章の終わりはマリラに対するアンの報告、おしゃべりで締めくくられるようになる。以下では幾何の苦勞について、アンは語っている。

“It's perfectly awful stuff, Marilla,” she groaned.

“I'm sure I'll never be able to make head or tail of it. There is no scope for imagination in it at all. Mr. Phillips says I'm the worst dunce he ever saw at it. And Gil—I mean some of the others are so smart at it. It is extremely mortifying, Marilla.”

“Even Diana gets along better than I do. But I don't mind being beaten by Diana. Even although we meet as strangers now I still love her with an inextinguishable love. It makes me very sad at

times to think about her. But really, Marilla, one can't stay sad very long in such an interesting world, can one?” (197)

ここでは直接話法によるマリラの受け答えはないし、その様子が作者によって間接話法で語られることもない。つまりマリラに関しては何の言及もないわけだ。アンはマリラに向かって一生懸命話している。勉強熱心で成績優秀なのだが、数学の幾何だけには苦勞しているというほほえましい内容で、充実した学校生活をとても楽しんでいる様子だ。下線部の「マリラ」という呼びかけが繰り返される。最後は付加疑問文による問いかけだ。これらによって臨場感が高められ、読者はマリラと同一化させられ、子供の話を聞く喜びと幸せを共有することになる。マリラは言及されないが、これはマリラの視点によるマリラの物語そのものではないだろうか。

マリラは子供を引き取り、思わぬ子育ての喜びを経験することによって覚醒し、それまで押し殺していた喜怒哀楽を表に出すようになり、アンによってそれまで生きてきた自分の価値観が揺さぶられることになる。ここまでが前半部である。

「前半部」という意味を説明するために、ここでふたたびフォースターの小説論を参照しよう。フォースターによれば、まず小説は「ストーリー」(物語)からなる。それは好奇心に訴えるものだ。「アンは引き取ってもらえるのだろうか」、「ギルバートと仲良くなれるのだろうか」といった、物語がどのように進んでいくのかという一番基本的な要素である。

そして小説のより高度な性質は、ストーリーの背後にある価値観の連なりである「プロット」だ。因果関係ということもできる。「ここでマリラはどうしてアンを叱ることを躊躇するのか。それは彼女自身が心の奥底で、アンと同じような思いを持っているからではないか」とか、「マリラが頑なに拒んでいた、ふくらんだ袖を許すようになったのは、アンの成長を認めて、大人として認めつつある表れであろう」といったような、読者に記

憶力と知性を要求する因果関係の連鎖である。

さてその上で、プロットはまとめ上げなければならない。つまり小説は全体の構造を持った上で、終わりを設定しなければならない。それが絵画的な意味を持つ「パターン」である。フォースターはアナトール・フランスの小説 *Thais* を例に挙げてそれを説明している。それぞれ不幸と幸福な人生を送っていた人物二人が出会い、その結果立場が逆転するという構造は、全体が砂時計のような形をとる、計算されたつくりとなっていることを説明している。その作品の構造が、美的な快感を生み出すというのだ。

the story appeals to our curiosity and the plot to our intelligence, the pattern appeals to our aesthetic sense, it causes us to see the book as a whole.<sup>6</sup>

38章からなるこの作品の中ほどの第20章“A Good Imagination Gone Wrong”で、最初はあいかわらず直接話法によるアンの長いセリフ、途中で何度も「マリラ！」という呼びかけをはさむおしゃべりが続くが、その後にマリラの持病である頭痛の話になる。

She[Marilla] had had one of her headaches that afternoon, and although the pain had gone she felt weak and “tuckered out,” as she expressed it. Anne looked at her with eyes limpid with sympathy.

“I do truly wish I could have had the headache in your place, Marilla. I would have endured it joyfully for your sake.”

“I guess you did your part in attending to the work and letting me rest,” said Marilla. “You seem to have got on fairly well and made fewer mistakes than usual. (227)

マリラは頭痛に苦しんでおり、アンがいたわりの言葉をかけて、家事を手伝うという何気ないエピソード

なのであるが、ここが重要な分岐点である。つまり保護者が子育てをしている構図から、子供が成長して対等の関係に近づき、その後は老いてゆく親を大人になった子供が世話・介護をするという流れが背後にあり、これもまた砂時計の形をした構造を持っている。このエピソードがその中心部、マリラとアンの立場が逆転してゆく分岐点なのだ。

第22章“Anne is Invited Out to Tea”で、アンは牧師の夫人にお茶に招かれる。喜びのあまりに興奮しきっているアンの様子に、マリラはアンの感情の起伏が大きすぎることに不安を感じるが、ここにきて自分が考えていた落ち着いた子供に育てようとするのが無理であることを悟る。

Marilla had almost begun to despair of ever fashioning this waif of the world into her model little girl of demure manners and prim deportment. Neither would she have believed that she really liked Anne much better as she was. (246)

ここで作者の間接話法によってマリラは自覚していないと説明されているが、マリラはそれまで自分が持っていた子育ての理想探求が現実的でないことに気付き、そしてその理想像とは違うとはいえ、ありのままのアンのほうが好きになっている。一方的なしつけが終わり、子供をありのままに認めることは、対等の関係の始まりなのである。

物語の後半は、アンの成長、学業や発表会での目覚ましい成果が描かれる。マシュウが大活躍する第25章“Matthew Insists on Puffed Sleeves”では、マリラが頑なに地味な服ばかりをアンにさせていたのを哀れに思ったマシュウが、クリスマスのプレゼントにふくらんだ袖の服をアンに贈る。

Matthew had sheepishly unfolded the dress from its paper swathings and held it out with a deprecatory glance at Marilla, who feigned to be contemptuously filling the teapot, but nevertheless

watched the scene out of the corner of her eye with a rather interested air. (272)

禁欲的なマリラは、アンが流行りの飾った服を着ることに徹底して反対していた。しかしアンとマシュウが喜んでいる姿を横目で見ながら、まんざらでもない様子を見せる。そして学校の発表会に関しては、子供たちが浮かれた様子になるのを批判的であったマリラだが、アンの詩の暗唱の成功を見て、考え方を変えてゆく。

That night Marilla and Matthew, who had been out to a concert for the first time in twenty years, sat for a while by the kitchen fire after Anne had gone to bed.

“Well now, I guess our Anne did as well as any of them,” said Matthew proudly.

“Yes, she did,” admitted Marilla. “She’s a bright child, Matthew. And she looked real nice too. I’ve been kind of opposed to this concert scheme, but I suppose there’s no real harm in it after all. Anyhow, I was proud of Anne tonight, although I’m not going to tell her so.” (276)

それまで厳しくしつけることに精一杯だったマリラだが、アンの成長を認め、その後は自らふくらんだ袖の服をあつらえてやるようになるのである(第31章)。

次の第26章“The Story Club Is Formed”では、アンは女友達と「物語クラブ」を作り、様々な話を創作する。それは恋愛ものだったり人が死んだりという幼稚な内容である。マリラは当然馬鹿馬鹿しいと一蹴する。アンはその話をアラン牧師夫妻やダイアナの伯母バリーにも披露した。

I read one of my stories to him and Mrs. Allan and they both agreed that the moral was excellent. Only they laughed in the wrong places. I like it better when people cry. (中略) Miss Josephine Barry wrote back that she had never read anything

so amusing in her life. That kind of puzzled us because the stories were all very pathetic and almost everybody died. (283)

じつにほほえましいエピソードである。聞いているマリラの様子は書かれていないが、この章の最後は以下のようなマリラのコメントで終わる。

“The way I feel at present, Anne,” said Marilla, “is that it’s high time you had those dishes washed. You’ve taken half an hour longer than you should with all your chattering. Learn to work first and talk afterwards.” (284)

いつものようにそっけない返事で終わっているが、マリラは30分もアンの話を楽しんでいたのである。すっかりアンの性質と行動を受容しているといえよう。ここも直接話法により、読者はマリラの視点に立って、子供の愉快な話を楽しむ構図になっている。

次の第27章“Vanity and Vexation of Spirit”では、アンが行商人から買った毛染めで、コンプレックスである赤い髪を黒く染めようと思い、それが緑色になってしまうという事件が起こった。これも大失敗とはいえ、あとになれば笑い話になるエピソードである。章の最後はやはりマリラのコメントと、それに対する作者の説明で終わる。

I do really want to be good, Marilla, like you and Mrs. Allan and Miss Stacy, and grow up to be a credit to you. Diana says when my hair begins to grow to tie a black velvet ribbon around my head with a bow at one side. She says she thinks it will be very becoming. I will call it a snood—that sounds so romantic. But am I talking too much, Marilla? Does it hurt your head?”

“My head is better now. It was terrible bad this afternoon, though. These headaches of mine are getting worse and worse. I’ll have to see a doctor about them. As for your chatter, I don’t know that

I mind it—I've got so used to it."

Which was Marilla's way of saying that she liked to hear it. (292)

ここでは頭痛がしていても、マリラはアンのおしゃべりを楽しんでいることを自覚するだけでなく、まわりくどい表現を使いながらもそれを認め、アン の失敗を特に批判はしないのであった。

終盤に近づく第31章“Where the Brook and River Meet”では、アンがグリーン・ゲイブルスに来てから4年の月日が過ぎ、彼女は15歳になっていた。あるときマリラはアンがすっかり成長し、自分より背が高くなっていることに気付いて驚く。

Marilla loved the girl as much as she had loved the child, but she was conscious of a queer sorrowful sense of loss. And that night, when Anne had gone to prayer meeting with Diana, Marilla sat alone in the wintry twilight and indulged in the weakness of a cry. (331)

マリラが失って悲しんだものは、アンの子供時代、驚かせ困らせ怒らせ心配させ、喜ばせて愛することを教えてくれた子育てすべての経験である。そのときは忙しくて精一杯で気がつかないが、それが終わって初めて、子育ての喜怒哀楽すべてが大きな喜びであったことに気がつくのである。

マリラは寂しそうに、アンがあまりおしゃべりをしなくなったことを指摘する。そしてアンがもうそういう気にならなくなってきたことを話すと、マリラは「物語クラブ」はどうなったのかと尋ねる。あれだけくだらないと言っていたにもかかわらず、マリラはもう失われつつあるアンの子供時代が懐かしくなっているのだ。

そしていよいよ子供の巣立ちが始まる。アンはダイアナの伯母に誘われ、町に泊まってホテルのコンサートを観に行くというイベントに出かける。4日間の不在のあと、アンはグリーン・ゲイブルスに帰ってくる。

“So you've got back?” said Marilla, folding up her knitting.

“Yes, and oh, it's so good to be back,” said Anne joyously. “I could kiss everything, even to the clock. Marilla, a broiled chicken! You don't mean to say you cooked that for me!”

“Yes, I did,” said Marilla. “I thought you'd be hungry after such a drive and need something real appetizing. Hurry and take off your things, and we'll have supper as soon as Matthew comes in. I'm glad you've got back, I must say. It's been fearful lonesome here without you, and I never put in four longer days.”

After supper Anne sat before the fire between Matthew and Marilla, and gave them a full account of her visit.

“I've had a splendid time,” she concluded happily, “and I feel that it marks an epoch in my life. But the best of it all was the coming home.” (312)

マリラはアンがいなくて寂しかったという言葉を出した。これも大きな変化と言えよう。そしてアンは「家に帰ってくるのが一番素晴らしいことだ」という泣かせるセリフを言う。

この小説の後半部は、アン の様々な成功が続き、マッシュウは当然手放しで喜んでいるが、マリラにとっても大変な孝行となる。アンはアヴォンリーの学校ではギルバートと並んで最優秀であり、特に先生の勧めもあってクイーン学院への進学クラスに入り、目覚ましい成績を上げる。

“I must say Anne has turned out a real smart girl,” admitted Mrs. Rachel, as Marilla accompanied her to the end of the lane at sunset. “She must be a great help to you.”

“She is,” said Marilla, “and she's real steady and reliable now. I used to be afraid she'd never get over her featherbrained ways, but she has and I wouldn't be afraid to trust her in anything now.”

(325)

孤児を引き取ることに反対で、特に最初にアンとトラブルを起こしたリンド夫人でさえも、アンが立派な成長を示したことを褒めている。それはマリラにとってこの上ない安心であり、喜びである。

またアンはクイーン学院では国語の最優秀となり大学への奨学金を得て、卒業式では一等となった作文の朗読を披露する。そこに参列しているマシュウやダイアナの伯母バリーも、マリラに向かって喜びの声をかける。

“Reckon you’re glad we kept her, Marilla?” whispered Matthew, speaking for the first time since he had entered the hall, when Anne had finished her essay.

“It’s not the first time I’ve been glad,” retorted Marilla. “You do like to rub things in, Matthew Cuthbert.”

Miss Barry, who was sitting behind them, leaned forward and poked Marilla in the back with her parasol.

“Aren’t you proud of that Anne-girl? I am,” she said. (375)

ここでも視点はアンではない。まわりの人間が次々にマリラに向かって賛辞の言葉をかける構図、プロタゴニストはマリラと思わざるを得ないだろう。

アンがあまりに出来すぎという感がある。発売当初の *The New York Times* の書評では、アンは幼少期からほとんど学校教育を受けていないにもかかわらずバーナード・ショーの語彙を引用したりしているし、遅れて学業を始めたにもかかわらず、アンは常に最優秀の成績を修めっていると指摘している。またモンゴメリ本人も、手紙の中で “too good for literary art” と認めている。<sup>7</sup>そして成績のみならず、次のようなアンのセリフは、あまりにも優等生過ぎはしないか。

It’s a serious thing to grow up, isn’t it, Marilla? But when I have such good friends as you and Matthew and Mrs. Allan and Miss Stacy I ought to grow up successfully, and I’m sure it will be my own fault if I don’t. I feel it’s a great responsibility because I have only the one chance. If I don’t grow up right I can’t go back and begin over again. (329)

この作品を、アンを主人公とした教養小説、一種のサクセス・ストーリーと考えれば、このようなセリフが随所に出てくるのは疑問である。しかしマリラの物語として読めば、寂しい老後を目の前にしたときに思いもよらず元気で活発な少女がやってきて、失敗を繰り返しながら子育ての喜びを経験し、その子供は決して押し付けるようなことをしないのに勉強熱心で成績優秀で、発表会では見事なパフォーマンスで喝采を受け、「家が一番いい」と語り、上記のような健気で親を泣かせるようなこと言うという、一貫した親のしあわせ物語と見ることができるだろう。

しかし子育ては終わる。子供の巣立ちの日がやってくるのである。アンが全寮制のクイーン学院に一年間行ったときにも、ガランとした部屋を見てマリラは泣いていたが、卒業後は奨学金を得てレドモンド大学に行くことに決まったのだ。そのときに、突然マシュウの死が訪れる。働き手を失った農家は、女手一つで切り盛りするのは難しい。目も悪くなってきているマリラは、とても一人暮らしが出来ないと考えて、グリーン・ゲイブルス売ることを考える。彼女にとって、人生最大のピンチが訪れた。

“We’ve got each other, Anne. I don’t know what I’d do if you weren’t here—if you’d never come. Oh, Anne, I know I’ve been kind of strict and harsh with you maybe—but you mustn’t think I didn’t love you as well as Matthew did, for all that. I want to tell you now when I can. It’s never been easy for me to say things out of my heart,

but at times like this it's easier. I love you as dear as if you were my own flesh and blood and you've been my joy and comfort ever since you came to Green Gables." (382)

マリラは悲嘆にくれながら、アンを自分の本当の子供のように愛していたのだと告白する。いままで気持ちを張りつめて厳しくしてきたことを、マシュウの死を迎えて素直に語る so 直なのであった。

マシュウが死んでしまうことについて、モンゴメリには多くの読者から意見を寄せられたらしい。それについては、自伝で彼女が語っている。

Many people have told me that they regretted Matthew's death in Green Gables. I regret it myself. If I had the book to write over again I would spare Matthew for several years. But when I wrote it I thought he must die, that there might be a necessity for self-sacrifice on Anne's part, so poor Matthew joined the long procession of ghosts that haunt my literary past.<sup>8</sup>

目出度く奨学金を得て、素晴らしい旅立ちをすることになったアンに、なぜ「自己犠牲の必要性」があったのだろうか。それにはこの作品の全体構造を、砂時計のような形をなしているマリラの子育て物語となっていることを思い出そう。物語の始めは、マリラが孤児のアンを引き取るころから始まった。幼く何も知らない子供のしつけが始まり、苦労しながら教育してゆく。それがいつしか成長してマリラを助けるようになり、マリラは逆にアンから様々なことを教わる体験をする。やがてアンは精神的に大人になり、巣立ってゆくのであるが、子供と親の関係は逆転し、最後には老いた親を世話して、介護の時代が来るのである。幼い子供は保護者に一方的に世話をされるのであるが、老人も同じように最後には一方的な世話になるのである(モンゴメリは、幼い頃大変厳しかった祖母に育てられ、のちに長くその祖母の世話をしたのちに看取っている)。しかしこの物語でア

ンがグリーン・ゲイブルスにいるのは数年間に過ぎず、その構図を実現するためには、マシュウの死と、マリラの失明の危機が必要になり、それによってアンが犠牲にならなければならないという必要性が出てきたのではないか。

マシュウの死後、アンはギルバートと仲直りをし、その様子を見ていたマリラはアンに驚く自分の過去を話す。

"What a nice-looking fellow he is," said Marilla absently. "I saw him in church last Sunday and he seemed so tall and manly. He looks a lot like his father did at the same age. John Blythe was a nice boy. We used to be real good friends, he and I. People called him my beau."

Anne looked up with swift interest.

"Oh, Marilla—and what happened?—why didn't you—"

"We had a quarrel. I wouldn't forgive him when he asked me to. I meant to, after awhile—but I was sulky and angry and I wanted to punish him first. He never came back—the Blythes were all mighty independent. But I always felt—rather sorry. I've always kind of wished I'd forgiven him when I had the chance." (385)

なんとマリラはギルバートの父親と仲が良かったのだ。ちょっとした諍いが原因で、マリラは怒ってすねて恋人を失った。それはまさにアンがギルバートにとった行動とそっくりだ。しかしアンはギルバートと仲直りができた。これはマリラにとって、自身が果し得ず長い間後悔してきた失恋を、代理のアンを通じて取り戻すことになるだろう。

以上見てきたように、この作品はマリラの物語であるという様相が強い。孤児のアンを引き取るという構図、マリラからの視点による子育て、それを通じての彼女の内心の葛藤、母性の目覚め、自己発見、さらにはアンを通じての価値観の変化。さらには子供が成長して巣立ちの日を迎え、

その後は立場が逆転して子供が支えとなってゆくことでこの物語は終わる。最後にはアンが自分が失った恋愛体験を取り戻すというエピソードまで加えられた、これはマリラの「子育ての話」なのである。

あまりにも大ヒットになった『グリーン・ゲイブルスのアン』は、圧倒的な期待を受けて次々に続編が出された。しかしモンゴメリはそれらの執筆にはうんざりしていたようである。アンが大学に行き、ギルバートのプロポーズを受ける3作目、*Anne of the Island*(1915)を執筆している時期には、友人への手紙に以下のように書かれている。

I am at work on a new Anne book—to be called *Anne of Redmond* and deal with the four years of Anne's college course. At no time did I take any great interest in it for I never wanted to write it. … And so the new book won't amount to anything except in the eyes of schoolgirls, who insist on knowing what further happened to Anne and Gilbert.<sup>9</sup>

執筆時の1914年は第一次世界大戦の始まった年であり、そんな動乱の時期にモンゴメリは少女の恋愛をテーマに小説を書くのも気が進まなかったようだ。また書き上げたときの日記には以下のように書かれている。

I finished “*Anne of Redmond*” to-day. And I am very glad. Never did I write a book under greater stress. … From a literary point of view I don't think much of it. Yet there is some fairly good material in it. But I cannot write of sentimental college girls. Anyhow, it is done, praise the nine gods!<sup>10</sup>

このように執筆の嬉しさもなく、自己評価も低い作品を書き続けるはめになったのは、一作目の成功があまりにも大き過ぎたことによる悲劇ともいえよう。

楽しんで書いた1作目『グリーン・ゲイブルスのアン』の執筆時、モンゴメリは書簡で『アン』について言及している。

It is a juvenilish story of and for girls but I rather hope some grown-ups will like it, too. It is called “*Anne of Green Gables*” and the character of the little heroine is the motif of the book.<sup>11</sup>

「子供向け」ではあるが、「大人にも楽しんでほしい」と彼女は書いている。「小さな女の子の性格が、この本のモチーフ」と言っているので、特にマリラの視点を強く意識しているとは言っていない。

しかし後日の言及では、以下のような謎めいた「秘密」を示唆している。

You speak of my having three styles. I daresay that is true. But the style of Anne is my real style. The others are only skillfully assumed garments to suit the particular story being “built.” I wrote Anne in my own style. And I think that is the secret of her success.<sup>12</sup>

モンゴメリによれば、彼女のスタイルには3つの種類があり、そのうちでも『アン』のスタイルが本当の自分のものであり、それが成功の秘密だと思っているという。アンが「巣立ち」をしてゆく2作目以降は、マリラの視点が薄れてゆく。一作目とそれ以降の続編の執筆意欲の大きな落差、そして結果的に残念ながら文学的評価の落差、それは『グリーン・ゲイブルスのアン』が実はかなりの部分マリラの視点で描かれている作品なのであり、「マリラの物語」が一作目で完結しているところにあるのではないだろうか。「大人の視点」で少女を描きながら、実は「大人の物語」を描いてゆくというスタイルがモンゴメリの「本当のスタイル」ではないかということは、作者本人に確認したいところである。

注

<sup>1</sup> この作品を批評するにあたり、親子関係（この場合は孤児と養母の関係であるが）に焦点を当てた論では、心理学的アプローチも多い。山岸はこの小説の魅力はアンによってマッシュウとマリラが変わってゆくことに注目し、エリクソンの自我発達理論を参照しながら親と子の「相互性」に視点を当てている。山岸明子「発達心理学の観点から見た『赤毛のアン』の成長の妥当性」、『順天堂保健看護研究』3、（順天堂大学保健看護学部、2015）。

<sup>2</sup> L. M. Montgomery, *The Annotated Anne of Green Gables*, ed. by Wendy E. Barry, Margaret Anne Doody, Mary E. Doody Jones, (Oxford: Oxford University Press, 1997), 43. 以下この作品の引用はページ数のみを文中に示す。

<sup>3</sup> ノーデルマンは、『アン』を含む「少女文学」を分析するにあたり、子供は自然な振る舞いによって、大人を文化的、人工的抑圧から解き放つパターンが見られると指摘している。“What each episode consists of is this: our child heroine shocks, and then delights, repressed or unhappy grownups with her childish spontaneity and lack of artifice. In acting “naturally,” she makes them more natural and brings an end to the artificial repression of their over-civilized values. She restores them to what they once were.” Perry Nodelman, “Progressive Utopia: Or, How to Grow Up Without Growing Up”, *Children's Literature Association Quarterly*, (Johns Hopkins University Press, 1979), 148. またノーデルマンは続けて子供は純粋さを示すたびに純粋さを失うことを学び、一方で大人は子供であることを学んで両者が近づいていくことを分析しているが、本論ではそれが逆転してゆくという構図を後述する。

<sup>4</sup> Edward Morgan Forster, *Aspects of the Novel*, (London: Edward Arnold & Co, 1927), 93.

<sup>5</sup> *Aspects of the Novel*, 106.

<sup>6</sup> *Aspects of the Novel*, 193

<sup>7</sup> Mary E. Doody Jones, “The Exceptional Orphan

Anne: Child Care, Orphan Asylums, Farming Out, Indenturing, and Adoption”, in *The Annotated Anne of Green Gables*, 427.

<sup>8</sup> L. M. Montgomery, *The Alpine Path: The Story of My Career*, (Createspace Independent Pub, 2016), 48.

<sup>9</sup> October 16, 1914, *My Dear Mr. M*, 73.

<sup>10</sup> November 20, 1914, *The Selected Journals of L. M. Montgomery Volume II: 1910-1921*, ed. by Mary Rubio and Elizabeth Waterston, (Tronto: Oxford University Press, 1987), 156.

<sup>11</sup> “To G. B. MacMillan”, September 11, 1907, *My Dear Mr. M: Letter to G. B. MacMillan from L. M. Montgomery*, ed. by Francis W. P. Bolger and Elizabeth R. Epperly, (Toronto: Oxford University Press, 1992), 35.

<sup>12</sup> May 11, 1909, *My Dear Mr. M*, 44.